2023 年 POW 友好プログラム　第 12 回米国捕虜訪日団

対話集会：2 月 14 日（17:30~19:00）　於：テンプル大学

【代表挨拶：ローナ・N・マーレイ】

日本に来られたことに感謝している。理解を深めるすばらしい機会を与えてもらった。新しい視点を得られただけでなく、「世代を超えたトラウマ(generational trauma)」を乗り越えるきっかけを得られたかもしれない。私たちは元捕虜だった父親たちのことで大きなトラウマを抱えている。私たち全員が思うことは、「敵は相手ではない。敵は戦争だ。問題は戦争だ（It's the war that is the problem.）」ということだ。人間というものは、非難する相手やものを求めがちだ。だが私たちは平和のプロセスを大切にしたいと思うようになった。なぜなら第二次世界大戦のようなことは、二度と決して起きてはいけないからだ。ここにいる、このような人たちとともに、あのようなことが再び起きないよう、世界に働きかけられるかもしれない。私たちはそう願っている。

【米元捕虜家族によるスピーチ】

1 人目：ローナ・N・マーレイ（Lorna N. Murray）64 歳

ユタ州サウス・ジョーダン在住、元教員。コレヒドールで戦った第 59 沿岸砲兵隊員ユージン・P・ニールセンの娘。父は 1944 年に 139 人のアメリカ人捕虜が犠牲になったパラワン大虐殺の、たった 11 人の生存者の一人。

私の父ユージンはコレヒドール島で捕虜になった。その後マニラ、パラワンに移され、パラワン島で滑走路 3 本を作った。2 本は未舗装であまり役に立たなかったが、1 本はコンクリート製だった。ジャングルを切り開くところから始めなければならなかった。収容所はとても原始的で、飢餓と病気が蔓延していた。

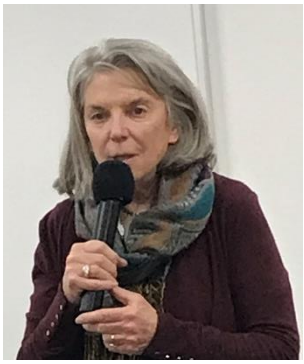
1944 年 12 月 14 日、捕虜たちは朝早く連れ出され、昼頃戻ってきた。捕虜の数は 150 人。空襲警報が 3 回鳴った。3 回目が鳴ったとき、捕虜たちは防空壕（塹壕）の中に入っていたが、上空にはアメリカ軍機がいなかったので、捕虜たちは変だと思った。武装した看守 50－60 人が彼らを囲んでいた。そこへガソリンがまかれ、たいまつと手榴弾が投げ込まれた。捕虜のほとんどはその塹壕で焼け死んだ。父がいたのは一番端の、有刺鉄線の柵の近くの塹壕で、そこは海岸につながる崖の上だった。父は二重有刺鉄線に向かって走り、腹ばいになって柵をくぐり抜けた。当時父はとてもやせていた。父が行くのを見て、別の捕虜も続いた。父は崖から飛び降り、落ちながら崖にはえていた木をつかんで、海岸に下

り立った。20〜30 人の捕虜が海岸へと逃げた。この海岸は砂浜ではなく、ごつごつした珊瑚礁の海岸で、隠れるところがたくさんあった。捕虜たちはくぼみに隠れたが、銃撃された。その海岸で残虐行為が行われた。詳しいことは言わないが、それは 6 時間に及んだ。海岸にはゴミ捨て場があり、遺体もそこに捨てられた。父はゴミと遺体の下で、死んだふりをした。

その後、父は頭を大きなココナツの葉で守りながら、海を泳ぎ始めた。だが見つかって、岸から銃撃された。3 回撃たれたが、収容所に戻るより海で死んだ方がましだと思い泳ぎ続けた。一晩中泳ぎ続けた。不思議なことにサメに襲われなかった。サメに襲われて死んだ人もいたからだ。

やがて対岸についた。真水を探してさまよい、大きな沼地に出た。どのくらいその沼をさまよっていたのか、わからない。父はマラリアにかかり、出血していた。やがて運良く沼を抜け、草の中に小道を見つけた。そこへフィリピン人がやって来た。父はここで死んでもいいと思い、一か八かで頭を出し、”Hey, Joe. Hey, Joe.”と呼びかけた。フィリピン人はびっくりしていた。ピジンイングリッシュ（片言英語)、タガログ語などを駆使して、なんとかコミュニケーションをとった。そのフィリピン人は親米ゲリラだった。彼は何をすべきかわかっていて、「あなたの友達がいる」と言った。父は生き残ったのは自分だけだと思っていたが、連れて行かれたところに他に 3 人いた。フィリピン人たちは命がけでかくまい、助けてくれた。日本軍が親米ゲリラを探している中、大きな無線機があるブルックスポイントまで行き、そこからオーストラリアに連絡してくれた。おかげで父たちは救出された。

2 人目：ゲイル・Y・スモール（Gail Y. Small）68 歳



ネバダ州リノ在住。フィリピンのクラーク基地で第 7 化学中隊、航空に所属していたジョージ・スモール少佐の娘。父は 1941 年 12 月第 31 歩兵師団第 2 大隊 F 中隊に将校として配属され、バターン死の行進、キャンプ・オドネル、カバナツアン捕虜収容所を生き抜き、日本では、大阪第 2 派遣所（梅田)、善通寺収容所、六呂師収容所に収監された。

私は元数学の教授。父は 100 歳近くまで生きた。長寿に値する、すばらしい人だった。謙虚で知的な人だった。父は 1908 年生まれで、勤めていた会社が大恐慌でストライキに入ったので入隊した。訓練を受けた後、パールハーバーの 6 週間前にフィリピンに着いた。アメリカ・イギリス・オランダなどの連合軍は、食料も武器も医薬品も補給がない中、4 か月間戦った。父はマラリアにかかった。食料がないので軍馬などを食べた。降伏したときは 2、3 日何も食べていなかったし、水もなかった。

父はバターン死の行進を生き延びた。3 日余りの行進では直射日光の下に座らされ、水も食料も与えられなかった。ついていけないと置き去りにされるか、銃殺された。フィリピンで最初に入れられた収容所は、ひどい状況だった。その後地獄船（hell ship）に乗せられた。ご存じだと思うが、捕虜が乗っていることが表示されていない船だ。船底に入れられたが、すごく混んでいて、横にもなれなかった。わずかな食料もバケツで下ろされた。排泄物も同じバケツを洗って使用した。17 日間の地獄船を生き延びて日本に到着し、3 つの捕虜収容所にいた。農作業をさせられたが、作った作物は食べられなかった。戦争前 150 ポンド（約 67 キロ）だった父の体重は、終戦時には 98 ポンド（約 44 キロ）に減っていた。捕虜だった間、栄養失調で脚気などいろいろな病気にかかった。

誰もどんな戦争も望んでいない。父がいたところ、父が苦しんだところを訪れることは、自分にとっては慰めだ。日本に来ておいしい食べ物も食べた。明日捕虜収容所を訪問する。つらいが、興味深いこ

とだ。こうした機会に感謝している。

3人目：トーマス・J・ホスキンス２世（Thomas J. Hoskins Jr.）75歳

テキサス州サンアントニオ在住。米陸軍信号部隊所属のトーマス・J・ホスキンス二等軍曹の息子。父は1941年12月8日、日本がフィリピンを攻撃したときレーダーユニットを操作していた。捕虜となってからはパラワン島に飛行場を建設することを余儀なくされた。その後日本に送られ、川崎地区の様々な捕虜収容所で労働をさせられた。戦後は米空軍の一等軍曹として軍務に就いた。

父と私は同じ名前だ。父は1937年に歩兵として入隊した。1940年頃にレーダー操縦のポジションがあると知って、レーダー操縦士になった。1941年夏にフィリピンに送られた。与えられた指令は、ルソン島西岸のイバに運搬可能なレーダー基地を作ることだった。そこは地理的に日本軍の巨大な航空基地があった台湾に近かったからだ。

12月8日の朝、突然攻撃を受け、レーダー設備が吹き飛ばされ、何人かが死んだ。そこでレーダー操縦の本部があるマニラに移動するようにと言われた。マニラに着いてしばらくしてから日本軍が上陸してきた。父はマニラ湾の入り口にあるコレヒドール島に移った。そこで父は砲手になった。戦闘が続き、5月、死傷者数も多く、食料も薬も兵器もないので、ライト将軍は降伏するしか選択肢はないと決断した。それで父は･･･。（泣きながら）父は捕虜になった。

コレヒドール島で何千人もが捕虜になった。ヒンドリーフィールドというところに何日かいた。そこで日本兵の遺体を集めてきて荼毘に付した。母国に返すためだ。アメリカ兵の遺体も集めてきて、浅い穴に埋めた。その後、貨物船3隻に乗せられてマニラに送られた。海の中を歩いてマニラに上陸し、ビリビッド刑務所まで遠回りをして5マイル（8キロ）行進させられた。フィリピン人たちに日本軍の存在を示すためだ。途中フィリピン兵は地元のフィリピン人の中にまぎれて逃げることができたが、アメリカ人は目立つので逃げられなかった。行進中に逃げようとして見つかったアメリカ兵やフィリピン兵はそこで銃殺された。ビリビッド刑務所に着くと、スチール製の貨車に乗せられた。人なら40人、馬なら8頭乗る貨車に100人が乗せられた。そこからカバナツアン捕虜収容所まで約60マイル（96キロ）の旅だった。途中死んだ人がいたが、彼らは立ったまま死んだ。（涙をこらえながら）でも到着するまで死んでいることに誰も気がつかなかった。到着して扉が開き、生きている人は降り、死んだ者は貨車に残ったのだ。そこから道路建設作業の準備のためにマニラに送られた。

建設作業のために2隻の船にコンクリートやシャベル、つるはし、手押し車などを積んだ。途中の島でライ病者のコロニーがあったが、彼らのために多くの荷物を下ろした。なぜそこに寄ったのかはわからない。日本人はライ病者のコロニーをとても恐れているようだった。なぜならライ病は接触感染するからだ。それで大量の補給品を与えたのかもしれない。

パラワン島に着くと、道路建設作業と聞かされたのは、実際にはコンクリート製の滑走路を作る作業だった。すでに未舗装の滑走路はあった。重機はなく、斧とつるはしで珊瑚礁を平坦にしなければならなかった。自分が読んだものによれば、10人につるはしが一本だったそうだ。セメントを手でまぜてコンクリートを作り、運んだ。コンクリートというものはとても重いものだ。

コレヒドール島以来、食べ物の量は徐々に減り、貨車に乗せられ、船に乗せられ、パラワン島で重労働をさせられた。それでも運のいい一部の捕虜は大丈夫だったが、彼らはジャングルを切り開く作業に

従事させられたからではないかと思う。作業によってはトイレ休憩のときにココナツなどの食べ物をとってこられたという話を聞いたからだ。日の出まもなくから日没近くまで働かされた。そういう日がずっと続いた。

9 月になって、捕虜 300 人のうち父たち 150 人は地獄船に乗せられて、マニラ、香港、台湾を経由して日本の門司に着いた。そこからさらに東京近郊の 3 つの捕虜収容所のうちの 1 つに着いた。今日私たちはそのうちの 1 つを訪問した。

4 人目：サンドラ・ハーディング（Sandra Harding）70 歳

ニューメキシコ州サンタフェ在住。フィリピンで捕虜となったコレヒドールの陸軍看護師アーリン・ブラック・ハーディング中尉と、パナイ島の第 63 歩兵連隊所属のハリー・J・ハーディング中佐の娘である。アーリンは降伏後マニラのサント・トーマスで抑留され、ハリーは日本に送られて、神戸ハウス捕虜収容所、善通寺、六呂師に収監された。2 人は戦後結婚した。

私の両親は共に捕虜だった。父は大恐慌で仕事がないので入隊し、フィリピンへ渡り、コレヒドール島へ送られた。

母は看護師で、志願してフィリピンへ行った。行くはずだった看護師一人が結婚のため行くのをとりやめたので、欠員を埋めるためだった。7 月にサンフランシスコを発った。コレヒドール島に送られた 4 人の看護師のうちの一人が母だった。着いたとき、彼女たちを出迎えたのは将校だった父だった。

1941 年 8 月、父はフィリピン人を訓練するためにパナイ島へ行った。母はコレヒドールに残った。

12 月 8 日状況は一変し、コレヒドールは空爆された。日本軍が上陸してきて戦闘になり、1942 年 5 月 6 日、コレヒドール島は陥落した。全員降伏した。父はパナイ島から船で門司に運ばれ、神戸ハウス、善通寺、六呂師の 3 カ所の収容所にいた。

母は 7 月にコレヒドールからマニラのサント・トーマス大学に移された。1945 年 2 月、母は解放された。父は 9 月 8 日に解放された。

母は、父は死んだものと思っていた。しかしデンバーの病院で働いていた母を父が見つけて、2 人は 1946 年 6 月に結婚した。

5 人目：マーガレット・A・ガルシア（Margaret A. Garcia）72 歳

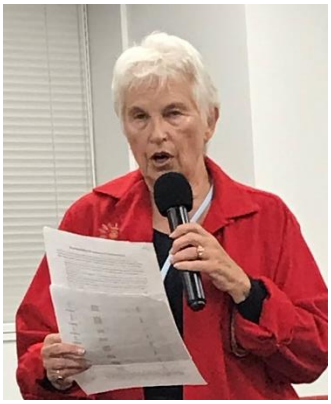
ニューメキシコ州アルバカーキ在住。ニューメキシコ州第 200 沿岸砲兵隊の伍長だった エヴァンゲリスト・R・ガルシアの娘。父は 1941 年 12 月 8 日、侵略してきた日本軍に最初に発砲した。バターン半島で戦い、バターン死の行進に耐えた後、1943 年日本に送られ、三井物産大牟田炭鉱で働かされた。

ニューメキシコ州は人口に対して入隊率が最も高い州。それは自立心が強い土地柄というのもある。

父はフィリピンのクラーク米軍基地にいた。バターン死の行進を生き延び、最初の地獄船（Hell ship）で日本に移送された。父は生涯日本に行こうとしなかった。なので私は、父の代わりに日本に来たよう

な気持ちだ。今回の旅は自分にとっては癒やしの旅だ。父は決して日本のことを悪く言わなかった。とても勇気のある人だと思う。明日父が収容されていたキャンプに行く。父が歩いたところを自分は歩く。父はフィリピンには何度か行った。戦争やバターンの教訓がフィリピンで語り継がれているかを確認していた。自分にとってもこれはライフワークだ。テンプル大学と POW 研究会に感謝する。

カレン・ブラディー・スミス（Karen Brady Smith）73 歳



フィリピンの第 228 陸軍信号中隊に所属していたジャック・E・ブラディ少佐の娘。父はバターン死の行進、キャンプ・オドネル、カバナツアン捕虜収容所を生き抜いた後、日本への最初の地獄船の一つである鳥取丸に乗船し、台湾、朝鮮を経て日本へ送られた。東京の大森捕虜収容所に収容され日本通運の荷役作業員、その後東北電気製鉄株式会社の岩手県の製鉄所で働いた。

父は UCLA 大学に一年通って後、授業料が払えなくなって入隊した。1941 年にマニラに着いた。バターン死の行進中、父は水を飲もうとして背中を撃たれた。あまりの痛みにその後の行進のことはほとんど覚えていないという。後年父は背骨の手術をしたが、術後はずっと車椅子生活だった。

父には 3 人の子がいて、自分が一番上だ。父は、自分は長生きしないと思ったのか子供たちには自立心を持つよう育てた。父は怒りっぽく、かんしゃく持ちだった。それは母との関係に影響を与えたが、子供に手をあげることはなかった。食事のことで罰することもなかった。自分は子供の頃は父の経験したことはわからなかったが、大人になってから理解し始めた。捕虜生活が長かったので、食べ物にいろいろこだわりがあった。自宅には常に 6 か月分の食料の備蓄があった。食事を残すことはいけなかった。うちの家族はよく米を食べた。元捕虜の中には米を食べない人もいるが、父は食べた。

父は教師になり、生徒に自分の体験を話していた。テレビでも話したし、退役軍人のグループでも話していた。父は日本人のことは憎んでいなかった。憎んでいたのは、非人間的な看守だけだった。

1997 年、自分は父にインタビューをした。2002 年にそれを本にした。家族や友人のための私家版だ。1 冊置いていく。残虐だったのは日本だけではない。残虐行為の中には記録されたものもあれば、記録されていないものもあり、忘れられてしまったものもある。大切なのは将来だ。謝罪の言葉はいいが、行動が伴わなければ意味がない。

リンダ・マクダビット（Linda McDavitt）76 歳

テキサス州オースティン在住。第 24 野戦砲兵連隊のジェローム・A・マクダビット少佐の娘。父はコレヒドールで降伏し、1944 年に日本に送られ、宇部興産が所有する炭鉱に労働を提供する大嶺捕虜収容所で捕虜指揮官を務めた。

皆さんに、特にゆか（元 P 研会員の伊吹由歌子さん）に感謝している。

父は 1941 年 5 月にフィリピンに行った。クラーク基地が空爆され、父は負傷者を運んだ。それから看護師たちをコレヒドールへ移送する任務についたが、海岸に着いた時船はもう出た後で、手こぎボートに看護師 3

人を乗せて、コレヒドール島へ向かった。後でモーターボートが残りの看護師を連れてきた。

コレヒドールが陥落した後、地獄船（Hell ship）で 62 日か 64 日かけて日本に行った。途中台風にあったり、船が壊れて修理したり、夜は岸壁に隠れたりしながら行ったので、日数がかかった。

父が入った収容所にはすでにイギリス人捕虜がいた。彼らはすでに 2 年そこにいた。アメリカ人捕虜は新参者だった。アメリカ人とイギリス人は性格も違って、あまりうまくいかなかった。

父は 70 歳で亡くなった。父の体験は母からも聴いていないので、自分で調べた。とにかく自分が言いたいことは、親に聞きたいことはすべて聞いておきなさい、ということだ。

日本人にもアメリカ人にも、いい人も悪い人もいる。うちは週 1 回米を食べた。父からは、よい人になって、人を助けなさいと言われた。

【質疑応答より】

Q１：皆さんはどのようにして父親の体験を知ったのか？

A１：自分は中学生のとき、パターン死の行進について作文を書いて良い点をもらった。父に言うと、父は「自分もその中にいた」と言ったのでびっくりした。16 歳になり、車の免許を取って三菱の車を買ったら、父は「I worked for them(自分は三菱のために働いた)」と言った。またびっくりした。

A２：父が元捕虜だとは知っていたが、詳しいことは知らなかった。父が 69 歳のとき、自伝を書くクラスに入った。父は潜在意識の中にあることを小説に書くことによって、苦しみを解放したと思う。

A３：自分が 14 歳のとき、ベトナム戦争の捕虜が作ったブレスレットを買った。父はそれを見ると、「自分も捕虜だった」とだけ言って、部屋から出て行った。自分は父の話を知らねばと思い、聞き続けた。今日話してくれなければ、明日。そうやって聞き出すのに、35 年かかった。

Q２：元捕虜の子どもとして感じる共通点はあるか？

A４：私たちは「世代を超えたトラウマ」を意識的、または無意識的に自分の人生の中に取り込んでいった。それは次の世代へもつながっていく。

A５：食事は決して粗末にしない、残さないという話。

A６：父たちは生き延びるために、とにかく独立心が強くなければならなかった。父からは常に「Be independent!（自立しろ）」と言われた。それが自分の DNA の一部になっている。

（記録：高川邦子、編集：小宮まゆみ）

スピーチと交流会を終えた米元捕虜家族の皆さんと POW 研究会の会員